
発展学習01-4 プラグマティズムに基づく真理基準

私たちは、子どもの頃から、科学というのは絶対的・普遍的な真理を探究する学問であるというように教わってきました。また、私の通っていた中学の校歌は、

♪ 若き日の 希望に燃えて うちたたく 真理の扉

という歌詞で始まっており、それを歌うたびに、真理というのは打ち叩いて開けた扉の向こうにあるというように刷り込まれてきたところがあります。

しかし、この電子版教科書の第1章でもいくつか例を挙げたように、何を同じとして扱うかといったカテゴリー分けや因果モデルというのはニーズによって大きく異なり、唯一無二ではない可能性があります。また「発展学習」の「世界仮説」でもご紹介したように、世界観には大きく分けて4通りがあり、どれが正しいかといった議論は本質的に無益であるとも主張されています。

プラグマティズムに基づく真理基準 (pragmatic truth criterion) とは、いわゆる「真理」というものは発見するものではなく、ゴール (特定のねらいや目標) を実現する上で、何が有用なのかということによって決まるという考え方です。そんなのはイヤだ、自分はいくまで絶対的真理の探究をめざしたいという方もおられるとは思いますが、よくよく考えてみると、そもそもそういうものが存在するのか、仮に存在していたとしてどうやってそれを知り、かつどうやってそれが絶対的であると証明できるのか、甚だ疑わしくなります。また、真理を探究していると称する学問も、実際には、その理論の無矛盾性、適用可能性拡大、効力向上、予測力向上、いっそうの簡潔性などを目ざしていたりして、当事者による肯定・否定にかかわらず、実質的には、プラグマティズムに基づく真理基準を採用している場合もあります。

この真理基準の最大の問題点は、ゴールが任意に (恣意的に) 選択されうるという点です。世界平和の達成、人類全体の幸福、難病の治療、防災、... などがゴールであれば良いのですが、世界征服、独裁体制強化、他民族抹殺などがゴールにされてしまったのではたまったものではありません。しかし、だからプラグマティズムに基づく真理基準はダメだ、危険思想だ、という考えは成り立ちません。むしろ、「絶対的真理の探究」という名目で古来より行われてきた研究を含めて、科学は何をみざすべきものなのか、間違った方向に進んでいるのではないだろうか、という危険性を常にチェックしながら、適切にゴールを選び、達成をみざしていくという姿勢が求められると言えます。

なお、たまに混同されますが、プラグマティズムに基づく真理基準と功利主義は別物です。あくまで長谷川が理解した範囲の説明になりますが、功利主義は、一般的に「最大多数の最大幸福」をゴールとして選択しています。プラグマティズムに基づく真理基準という観点から言えばそれも1つのゴールとしてアリ、但し、「世界は自分のためにある。自

分の利益こそすべてだ」というのもまたゴールです。同じような見方をすると、ある宗教家が、「世界平和と人類全体の幸福」というゴールを選択した上で教義を体系化し、かつそれを実現するために有用な布教活動を確立しようとするのがあったとしたら、その宗教家が建前の上では「私が説く絶対的真理を信じなさい」と訴えたとしても、実質的には、選択されたゴール（＝信者の増加、当該宗教の影響力拡大）達成をめざしているという点で、やはりプラグマティズムに基づく真理基準を採用しているということになります。

以下は、関連書からの引用です。一部改変あり。今後、さらに追加していく予定です。

【トールネケ, N. (著) 武藤崇・熊野宏昭 (監訳) . (2013). *関係フレーム理論(RFT)をまなぶ：言語行動理論・ACT入門*. 星和書店.】

【27～28頁】

… 機能的文脈主義に基盤を置くということは、いわゆる「真理」を発見するとか、理解するといった主張は差し控えることを意味する。その代わりに、私たちは、プラグマティズムに基づく真理基準(pragmatic truth criterion)を採用する。この基準を用いると、何が真理かということは、特定のねらいや目標を実現する上で、何が有用なのかということによって決まる。これはまた、科学がそれ自身のねらいを明確にする必要があることを意味している。「全般的に」機能するものなどない。何かが機能していたら、それは特定の「何か」に対して、あるいは私たちがねらいを定めていることに対して機能しているのである。そして、行動分析家が持っている目的は2つ存在する。それは「予測と影響」なのである。

【武藤崇(編) (2011). *ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ハンドブック 臨床行動分析によるマインドフルなアプローチ*. 星和書店.】

【7頁】

… [文脈主義の] 世界観では、究極的な真理は存在せず、認識者と被認識者という二分法もなく、因果律も実在しないと捉える。このように考えることは、認識すること自体を否定しなければならなくなる。そこで、ある恣意的なゴールが設定される場合にのみ認識の可能性が生じる、と捉えるのである。つまり、この世界観の真理基準は「その恣意的なゴールが達成されたか否か」(successful working) という事となる。もし、そのゴールを「事象に対する予測と影響」(prediction and influence) とした場合には、文脈主義が持っている「ゴールを達成する」という実用的な発想から、機械主義的な理論を採用する場合も考えられる。ただし、その場合に注意が必要なのは、そのような選択は、あくまでもそのゴール達成のための手段にすぎない、ということである。

【14～15頁】

… 機能的文脈主義は、上述したように、対象に対する「予測と影響」という統合的なゴールを選択する。このゴールを選択したうえで、科学的な研究活動（以下、「科学」と表記する）とはどのような機能なものになるだろうか。その機能とは、そのゴール達成のために有用な言語ルールを産出することである。

そして、科学的な研究者（以下、「科学者」と表記する）は、そのようなルールを産出

するための「ことばの作り手」(words makers)なのである。決して、科学の機能は先験的な真理・法則の発見ではなく、科学者の機能はその真理・法則を特権的に知りうる司祭的な役割でもない。さらに、そのルールは産出されるだけでなく、他者に報告されねば機能を果たせないと捉える。そのような意味では、科学者とはシンガー・ソングライターと類似の機能であると言ってもよいかもしれない。

科学がそのような機能であるとした場合、客観性、因果律、データはどのように捉え直されるだろうか。まず、客観性とは、科学者が対象に対してどのような影響を及ぼしているかを常時モニターするための方法論的スタンスであると捉えることができる。それは、決して、対象を一方向的に知るためのスタンスではない。この場合、求められる客観性の精度は、当該の言語ルールに要求される精度に依存することとなる。また、完全に対象と独立した観察的視点も存在しないと捉える。つまり、客観性とは、科学者とその対象との距離を常時正確に把握し、科学者からの過度な干渉を及ぼさないように、あるいは対象の属性に問題を還元しないようにするための倫理的スタンスであると言えよう。

次に、因果律とは、(上述の客観性というスタンスにおいては)「予測と影響」を可能にするための効率的な言語ユニットのことである、と捉えることができる。「if… then…」という「独立変数-従属変数」で表される関数関係は、研究者の具体的なアクションとそれによる対象への影響を表記する最善なユニットなのである。さらに、その分析ユニットは、研究者力罫どのようなゴールを選択するかによって変化する。つまり、ある場合には従属変数であったものが、別の場合には独立変数となることもある。また、ユニットの大きさも研究者が選択するゴールによって変わることになる。

最後に、このような文脈において「データ」はどのような意味を持つのだろうか。この場合、そのデータが数値化されたものであるか否か(一般的には「量的」データか「質的」データかという問題)ということも、先験的には意味を持たない。換言すれば、選択したゴールを達成することに全く関係しないようなデータは、いくら数値化(量的)されたものであっても全く意味を持たず、逆に、そのゴール達成に有用なら、記述的(質的)データであっても意味を持つのである。

【17 頁】

価値の選択を優先する: 上述したように、機能的文脈主義の真理基準は、任意に選択されたゴールの達成(successful working)である。ただし、そのゴールは、単に選択されるだけのものであって、そのゴールそのものの正当性は証明されることはない。つまり、ゴール選択がそのまま当事者の価値(の一部)に関する表明となるのである。このことは、ACTの実践行動でも、重要な手続き的要素となっている。

【18 頁】

ACT では、クライアントによる価値の選択を手続き化し、それを顕在化させ、セラピストと共有することになっている。また、先験的にかつ究極的に「正しい」価値は存在しないことも強調される。さらに、ここでの価値とは、すぐに達成されるべき目標のことではなく、今までの生活で無自覚にしてきた行為に含まれる潜在的な哲学や、これからの生活の指針になるような方向性のことを意味している。